



雲青き

さいたま市立大成中学校 学校だより

7月号 令和7年7月1日

ヒマワリのように

校長 福田 博志

そろそろヒマワリの花が見られる季節となります。私は、ヒマワリを見るのがとても好きです。なぜなら、夏のまぶしい太陽の下、明るく鮮やかに咲くヒマワリを見ていると快い開放感に浸ることができるからです。ヒマワリの花をよく観察するといつも太陽の方角を向いていて、小さな虫たちが集まってきていることに気がきます。元来、虫好きの私にとって、幼少の頃はチョウや小さなカナブンを捕まえては実家の縁側で夢中になって観察したものでした。ヒマワリの花は、いつも太陽の方を向いているから「向日葵」、なるほど確かにその通りだと妙に納得したことを中学生の頃に記憶しています。



「顔をいつも太陽の方に向けていて」

これは、アメリカの作家ヘレン・ケラーの言葉です。ヘレン・ケラーは、幼い頃に病気で視力と聴力を失いました。何も見えず、音も聞こえない孤独感や絶望感は、すさまじいものであったに違いありません。しかし、彼女は教師や家族に支えられ、学び、力強く人生を歩んでいきました。同じ障害を持つ人たちのために世界中で講演活動を行い、点字法の統合にも献身的に尽力しました。ハンディキャップに絶望することなく、常に人生の明るい面を見つめ前向きな気持ちでいたからこそ、数々の功績を成し遂げることができたのでしょ

私はかつて、「嫌なことやイライラすることはばかりに目が行ってしまう」「自分と気の合う人とは、尊重し理解し合うように歩み寄ることができても、そうでない人に対しては、理解しようとする前に自分から心を閉ざしてしまう」そんな経験がありました。

世の中、気の合う人もいれば、反りが合わない人もいますかと思えます。それでも、どんなに合わないお相手にも必ず「よいところ」「学ぶべきところ」があるはずなのです。さらには、お相手の「よいところ」に学ばせてもらおうという気持ちで、人と接していくことが自分自身の心の成長につながっていくのかもしれない。

「長所」や「よいところ」が見えてくると、相手に対する思いが少しずつ変わってきます。それと同時に相手の「よいところ」が見えるようになった自分も一つ成長できたと言えるのかもしれない。その意味では、苦手な人、気の合わない人に出会った時こそ、人として成長できるチャンスなのかもしれません。

ヒマワリの花のように人や物事の「よいところ」「明るい面」を見ていけるようにいつも心がけたいものです。